The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞板倉氏「日本文法の話」
Author(s)	林, 和比古
Citation	語文. 1953, 8, p. 38-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68423
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評　阪倉氏「日本文法の話」

林　和比古

一

文法といふ学科において、読者に対し興味をもたせることができ、また帰納的に言語現象を観察する力を得させることができたらとねがふ著者は多い、本書もそのやうな目的で書かれ、十分な出来栄えを示してゐる。

この書では国文法の中でつねに問題になる現象が重点的にとりあげられてゐる。それを拾ふと

文法とは何か・文章・文・文節・単語・詞・辞・複合語・接頭語・接尾語・単語の分類・名詞・代名詞・動詞・形容詞・形容動詞・連体詞・副詞・接続詞・助動詞・助詞・感動詞・品詞分類

などである。これらの諸項目に対し先輩諸学者の説が紹介されつゝ興味深く理論的に説明されてゆく。とりわけ山田孝雄・橋本進吉・時枝誠記三博士の説がおもなよりどころとなるが、とくに時枝学説が結論的に採用されてゐるのが目につく。

普通の文法で助動詞「です」と考へられてゐるものを、著者は助動詞「だ」の一活用形「で」、または形容動詞の「で」（例へば「静かで」）に新しい敬譲助動詞「す」の加はったものと考へる。かやうな新説もあるが、本来この書の特色は前記諸学者の説を著者が十分そしやくし、その粋をよりすぐって文法的な考へ方に導いて行くといふところにあらう。各項目の説明は肯綮にあたり、枝葉に流れず、必要なものはかならずとらへて流石である。そのうへ文章は平易流麗であり、巻頭、狼少女の話にはじまり、所々に挿入される比喩や例文は極めて巧妙である。まことに読みやすく、序文にのべられた趣旨に合致して感歎の外ない。著者の対象とせられる若い人ばかりでなく、文法を教へる立場の人にもこの上もない参考書となるであらう。

二

次に書評子の立場から、枝葉はさておいて比較的中心と思はれる一二の点について卑見を述べることにする。

詞辞を基準とする分類について

品詞分類の基準としては機能を第一に、形態・意味を併せ考へてゆくといふのが従来からの方法であり、著者もこれによって「機能」を従来の意味にとり、分類基準にしてゐる。（本書一三〇頁―一三二頁）

ところが、その「機能」の概念に、二八六頁以下になると、時枝学説の詞・辞がとり入れられてきて、これが機能の最も重要な位置を占めることになる。時枝学説は新学説であって、新「詞辞」が従来から用ゐられてゐる機能（職能・用法などともいふ）と同範疇に考へられるものかどうかには何らか説明を要するのではなからうか。著者は巻末に至るにつれ新「詞辞」を以って品詞分類の根本的基準と立て、分類を実施してゐる。つまり機能といふ概念の内容がいつの

間にか変化し、品詞分類の基準が移動してゐるが、その理由は説明されてゐない。たゞ詞辞は言語にとって根本的に大切な性質だから之によって分類するのだといふやうに説かれてゐる。

次に新詞辞は時枝学説の立場だけからはなるほど明白であるが、実際の語としては詞と辞の両方の性質を併せたものが多く、この事は著者によっても度々指摘されてゐる。

○「か」「も」「だけ」「よ」などが辞であることは比較的簡単に了解できますが、「が」「に」「を」などが辞であるといふのはちょっと納得しにくいでしょう。（八〇頁）

○その（詞と辞を指す）中間には、このどちらとも言いうるような性格の語があると考えるべきでしょう。（八六頁）

○形容詞もまた詞辞の両方にまたがる語というべきです。（一八九頁）

○「あかい」の「い」には客体的なものと主体的なものとが融合していると考えるのです。（二〇〇頁）

○「強くない」などの「ない」は詞辞の中間に位するものとして……少々別にして考えるべきものでしょう。（一九七頁）

○副助詞―この種の助詞には幾分詞的な面があるようです。（二一八頁）

著者のいはれるやうに詞辞の間をゆれ動く語は多く、見方によれば体言をのぞくあらゆる語は詞辞の両性を備へるといへるかもしれずまた体言にしても文中にあれば、零記号の辞を附けるなどと説明せられるが、いひ方をかへればそれ自身辞性を帯びて文に使はれるともいへるであらう。

かやうに主観的にどちらとも考へられるにもかゝはらず詞と辞の二つに全ての語を二分するといふことは「若い人」を当惑させはすまいか。

かう言へばとて、評者は新「詞辞」説を意味論として、また新言語理論として価値ある学説であることを認めるに吝かではない。たゞこれを品詞分類の第一基準として適用してよいかどうかといふところに問題を置くのである。著者自身これと同意味の言葉を最近もらされたやうに思ふ。（解釈と鑑賞二七年一二月号「時枝文法の特質」参照）

著者及び読者の大部分が橋本文法的な詞辞概念を共通地盤にしてゐるからこそ、新詞辞分類も一応分るのであるが、もし将来新詞辞観ばかりで分類するといふ時がくるなら、各人各様の区分が生ずるのではあるまいか。

代名詞なども新詞辞観で分けるなら、辞にはいるべきものであらうが、巻末の分類ではやはり体言の中に留ってゐる。趣旨の不徹底といふことになるが、やはり著者も踏切りがつかなかったのであらうと臆測される。

言語の単位

次に時枝文法では言語の単位は各人の意識に自明的なものであるとして特別な規定がないのである。これに対し橋本文法では周知のとほり文節を規定し、それから詞辞を規定してくる。これは、各自の主観だけでは区々に分れて、普遍的な認識に達しないことを惧れたためである。この書では橋本文法的に一応説明しながらも（一〇一頁）、また他面

○もっとも、先に言いましたように、「山」とか「行く」とか「白い」とか「やっと」とかで、それだけで一つのことばの単位であ

ることは別に分析的な操作をしなくてもごく自然に考えられます。（一〇一頁）

○今の場合は独立とか附属とかいうこととは無関係に、語の性質そのものについて考えたものですから……（八一頁、傍点評者）

といふやうに、時枝文法的に先験的に自明なものとして単位を考へてゐるだけで、両つの考へ方の相異に対しては説明も批判もない。さうして巻末の分類には新詞辞観による分類が提示されてゐる。にもかゝはらず前述のやうに詞辞連続観がところ〴〵述べられるといふわけである。

この書の巻尾の引用文

実に困難なのはこの種の考察の体系的完成を求めることである。如何に周密な体系を構成しても、言語自らは、常に体系以上に博大であると共に、また以上に細緻であることを示して来た。

これは評者が最初に読んだ時は美しい文章だと思った。二度目に読んだ時には二つの単位観の間にふみ迷ふ著者の苦悩の表れであると感じた。こゝに現今文法界の問題があるわけであるが、著者の巧みな言葉遣に魅せられて、「若い人達」には問題が問題として表れて来ないで、分ったやうな分らないやうな一種の感情となってはね返ってこないであらうか。

三

文法とは何か

文法とはどういふものかといふことについて、著者は巻頭に説明をしてゐる。

○文法論は特にことばの単位になっている文章・文・文節・語をとりあげて、それら相互の関係を明らかにし、これを整理してそこにいろいろの型を見出して行こうとするのです。（一〇頁）

○文節はこうして相互に直接間接につながり合いながら一つの文をつくり上げていますが、その場合文節相互の並び方にはやはりある程度のきまりがあります。これ即ち一つの文法であります。（五三頁）

右に述べられたところは橋本文法的な考へ方であり、常道的な考へ方であるが、かやうな考へに終始立ってゐるかといふにさうとも見えない。文法のための単位認定において、或は文法上の結論としての品詞分類として、巻末に掲げられたものを見ると時枝文法観に立ってゐると思はれる。つまり何時の間にか文法そのものゝ考へ方が移動してゐるのである。

御承知のやうに時枝文法では

文法学は、言語に於ける単位である語・文・文章を対象として、その性質・構造・体系を研究し、その間に存する法則を明かにする学問であって……（時枝氏、日本文法二四頁）

とせられ、文法学は言語本質学の相貌を帯びてくるのである。（このことの是非はこゝでは問はないことにする。）さういふ学説においては語の本質的差別である新詞辞による分類が意義をもってくる。

著者がこの文法観をとられたかに思へる言葉遣もときどき見出せる。

○複雑きわまることばのいろんな現象を整理して、そこから一つの通則を見出さうというのが文法研究の立場であるからです。（一一七頁、傍点評者）

○表現という面からこの内容と形態とを綜合的に考えて行こうとするのが時枝文法の立場であらうかと思われます。（三〇頁）

また著者が時枝文法観に移動したからこそ、巻末のごとき新詞辞を第一基準とした分類を行はれたのだと思はれる。

かういへばとて評者は時枝文法と其の他の文法とを峻別せよといふのではない。移動もよく採長補短も結構と思はれるが、たゞ文法といふ学問は国語史研究などとちがって、あの説この説の長を採って完成させるということの困難なもので、いはゞ方法論の一貫性が必要な学問である。ただ面白い説だからその部分だけを採るといふことは出来ない。移動には移動の必然性を示さねばならぬであらう。

さらに評者の欲をいふならば、動詞の活用形などを問題にするのは、文法の大目的とどういふ関係にあるのかなども述べられてあればと思った。

世の人は、文法というものは活用形を暗記したり品詞に分類したりする小うるさいもので、現実の用と何のかゝはりももたないものだと思ひがちなものであるから。

しかしこの書は「日本文法体系」ではなくて「日本文法の話」であり、いはゞ文法についてのトピックスであるから、面白い学説、興味ある現象を紹介すれば一応の目的は果したことになる。その点この書は十分の成功を収めてゐるといへる。評者はなくもがなのせんさくを施してかへって自己の迷妄をさらした事になるかもしれない。

たゞ、文法の問題はいわゆる専門書であらうと入門書であらうと、本質の洞察からそれてゐることを許されない。小学生の読み物でも本質を把握した書物であるなら第一級の専門書としてよいのである。さういふ意味の専門書はまだ出現してゐない。前述評言したやうな点や橋本文法観・時枝文法観の位置づけのやうな根本的な問題が未解決の状態である。

願はくば、著者のやうな俊鋭の篤学によって、問題の多いこの学問に新展望がもたらされる日の来ることを祈ってやまない。

（二七・一二・二七）　—大阪大学助教授—

日本文法の話

著者　阪倉篤義　　発行所　創元社